阿部知二全集

第6巻

阿部知二全集

第6巻

河出書房新社

阿部知二全集　第6巻

一九七五年一月五日　初版印刷
一九七五年一月十日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

黒い影 5
おぼろ夜 73
信教 127
窓の眺め 149
暮春 164
暴民 177
民謡 192
秋草図 205
城 220
失楽園 235
銀色の女 251

隣人 265
あらまんだ 290
解題 福田久賀男 313
解説 阿部良雄 320

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

阿部知二全集　第6巻

黒い影

「D――」という、神戸の港にちかい酒場で、今里辰作が友人の実業家Kとビイルをのんでいると、小粋な女をつれた中年の紳士が二人入つてきたが、たがいに常連とみえて、Kとしたしげに挨拶した。これで、この小さな室はほぼ満員になつた。

「何しろ五年ぶりに逢つたんだが、ヤソ教の学校の先生がこんなにのむとは知らなかつた。」かなり酔つてきたKは、親しげに今里の肩をたたき、らんぼうにビイルを注いで、さらにすすめた。

店の主人もほかの三人の客も、釣りこまれて笑いながら、ふしぎな動物が今夜は紛れこんだものだ、というような眼つきで、今里をながめた。

「もう帰る。」今里はばつの悪さに、腕時計をのぞきこんだ。

「やつと京都市内の終電車に間に合うかどうかというところだ。たしかに、よく飲んだものだつた。」とKがいつた。

京都のある宗教大学の文科につとめている今里は、今日この街にきて、ある団体で講演をしたのだが、その後で、ふと学生時代からの友人のKをその会社にたずねてみて、そのまま何時間ものみ歩いたのである。先輩の実業家たちが追放になつたためでもあろうか、まだ四十をいくつも出ぬKは、なかなか羽振りのいい地位にいるらしかつた。今里は、自分の薄給や、飜訳などから入るいささかの金のことを、考え合わせて見るまでもなく、甘んじてKの馳走になり、その誘うままに任せた。

「その足元じや危い。」Kは、とまり木からおりて歩き出そうとする今里の腕をとらえて放さなかつた。「今晩は泊りたまえ。そうすれば、まだ二三時間はたつぷり飲める。なに、ぼくのうちに泊るのがいやだつたら、これから花隈あたりの宿屋にでも行つて、そこの美人でも呼ぼうじやないか。――なに、ヤソ教の学校だつて、かまわないんだろう。」

「ヤソ教ヤソ教といわんでほしいな。酒がさめちまうよ。」みなの笑声を耳にしながらいつたが、もはや酔つていて、しつかりとした意志力をうしなつていたものとみえて、そのままKに腕をとられて、外に出た。

山手に向つて歩きながら、リンタクを探したが、冬の夜風が、暗い建物のあいだの坂路を、海から山の方にさむざむと吹きつづけていた。上の真暗な空には、星がいちめん

にかがやいていた。向うから流してきた車を、Kが呼びとめて、大きな石造建築のかげの闇の中で、乗りこもうとした。そのときに、ふと今里の眼は、数間ほどはなれた漆黒な闇のなかにうごめく影に吸いつけられた。それは、はたして人間の影だつたといい切れるかどうかも分らぬほど、漠とした印象だつたが、とにかくそれが、一かたまりの陰翳をなして、すうと風が流れるように、または、どろどろの液体様のものが漂うように、Kのうしろから車台に足をかけながらよろめいていた彼の方に、近づきかけたかとおもうと、たちまち周囲の闇の中に溶けゆらめき、それからまたすうと風のように、向側の建物と建物との間のせまい路地に、消えて行つた。今里は身ぶるいした。何かに狙われおびやかされたというような感覚は、その影のようなものが去つた後にも、はつきりと残つたからである。何ものだつたのか。まさか獣だつたのではあるまい。だがもし人間だつたとするならば、頭の先から足の先まで、のつぺらぼうなマントのようなものでもかぶつていたのだろうか。そして、その黒いマントが、いましがたの瞬間に、ふわふわと流れてきて、彼の体に蔽いかぶさつてきたような心持がしたというのは、どういうことだつたのだろうか。

「どうした?」走り出したリンタクの中で、Kが肩をたたいた。「さつきから、ぶつぶついつてふるえてるじやないか。——里心でもついたのかい。こいつは、もう一しきり勇ましく飲みなおさぬといかん。」

「すこし寒いのかな。」今里はこたえた。その時、これは、酔つたための、——つまり酒精中毒の幻覚というやつが、始めておれに訪れてきたのではないか、という考がひらめいてきて、したたかな絶望感と自己嫌悪とになつて彼をうちのめした。だが、そういう生理現象とする方が、まだしも、さつきの不気味さよりは心を軽くするものがあつたのかも知れない。というのは、心の一方では、あれは決して酒の幻覚などではなく、たしかにあの時には影のようなものが、闇の奥から狙をつけて迫つてこようとしたのだ、と断定するものがあつた。

そのうち、坂の中腹の小じんまりとした宿屋にきたが、Kはここを常住に使つているのか、女将と二人の仲居とが、あいそよく迎えて、二階のすみのしずかな部屋に案内した。戦災のあとの建築だつたが、木構も調度もかなりよろしく、床の軸や花もととのつていた。Kが、コタツをもつてきた仲居にいいつけると、夜もおそかつたのに、新鮮な魚の料理がはこばれ、きりようのいい若い芸妓がふたり、話上手らしい年増のそれにつれられて入つてきた。

「さあ、陰気になんかならないで、飲もう。」Kは、どうして久振りの友人を浮き立たせようかと心を砕いていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「よし、おれも今夜は君とつき合つてここに泊ろう。」
そういつて須磨の自宅に電話をかけに立ち、もどつてくると、明日の朝は、うちにいいウィスキもあるから、ぜひ帰りに寄つてもらうことにして、今夜はここで、更けるまで談じよう、といつた。友人のこのもてなし振りへの義理からも、陰にこもつた顔つきなどはできぬ、と今里は思つた。そして、女たちをまじえてしやべりつづけながら、酒精中毒もあらばあれ、と、酒やビイルをのみ重ねて行き、やがて、Kが十分に満足するほどに、いやかえつて驚くほどに、はしやぎはじめた。——しかし、じつさいは、さつきの黒い影が、ときどき体のまわりに流れてくる心持を、完全に追いはらうことはできなかつた。
かれこれ二時ごろ、二人ともまつたく酔いつぶれて、隣り合つた部屋にとられた床に、仲居たちに助けられながら、いざりこむように入つた。——眠りの中に、恐れていたように、影はのしかかつてきた。たしかに、そのつぺらぼうの真黒なものは、布団のうえに、どこからともなく流れただよつてきて停止し、彼の胸をおさえつけ、しだいに首を絞めてこようとした。こいつは恐るべき夢だ、とはつきり自覚して、眼をさまさねばならぬとおもいながら、手足を振りうごかそうとするが、体は痺れたように動かなかつた。そこで、声をかぎりに叫び出すことによつて、この夢からさめて脱却し、絡みつき圧迫してくるものから逃れようとしたが、声もなかなか出なかつた。
「おいおい、おいおい。」という声が遠くからきこえた心がして、眼をさましてみると、隣室からKがきていて、電燈をつけ、体のうえにかがみこんで首をかしげていた。体は汗みずくになつていた。
「ひどいうなり声だつた。びつくりしたよ。どうしたんだい。」Kは心配そうだつた。
「いや、何でもないんだ。——飲むと、寝言をいつたりうなされたりする癖があるんだよ。——なに、もう大丈夫だ。——ほんとにすまなかつた。こんな心配かけちや、面目次第もない。」心からあやまりながら、きまり悪さに、枕元のタバコに火をつけて吸い、水をがぶがぶと飲み、強いて快活な笑顔を見せながら、大丈夫大丈夫と何度もくりかえして、ようやく引取つてもらい、スタンドの灯を消して、静かに眠ろうとした。
こんどは眼が冴えてきて眠れなかつた。にじみ出た汗が冷える肌つめたさに、何度も寝がえりをうつたが、家の外を吹きめぐる風の音が、耳にこびりつき、その風に乗つて、またしても黒いものがただよつてくる心がした。その思をかき消そうとして、また灯をつけ、水をのみ、タバコに火をつけたのだが、その時に、稲妻のように、一人の女の顔

が心にひらめいてきて、たちまちそれが、あのどろどろの黒い影の中に融けこんでしまつた。胸の鼓動が二三度つよく打つた。「酔狂の幻覚などではない。おれはたしかに見た。影が迷い出してきているのだ。おれとあの女とを呑みこもうとしているのだ。」と心がはつきりと叫んだ。そして、明るい光のなかにゆれる、赤、白、黄、紫、淡紅、さまざまの色どりの花のむれのなかから、広村志摩の顔と体とがいよいよ明瞭に浮びあらわれてきて、その濡れた唇の触感までが、なまなましく彼の唇のうえによみがえつてきた。——今日、というよりは、もはや昨日というべきだが、講演にくる前に、彼はそつと急行電車の阪神間のある駅で降りて、海の見える坂路をのぼり、志摩の花店に立ち寄つた。それからしばらくして、見送つてきた彼女の肩に、松の生えた崖下の日だまりで、自分の手をおいたかとおもうと、どちらからとなく求めた接吻を、恐る恐るではあつたが交わしてきた。

今夜の黒い影が、その志摩の夫そのものだということを、今ははつきりと認知しなければならない。これがたとえ幻覚、妄想、迷信であろうとも、その底には、どうしても動かすことのできぬ真実が存在しているのであり、このことに、あの影を見た刹那に、気づかなかつたということこそ、まつたくの不思議というべきだつた。しかし、今となつては、罪の意識がなかだちとなつて、彼と女とは、その暗黒なものの中に深く包みこまれてしまつていた。——今里は、肉体の苦痛のようなものをおぼえながら、一種の昂奮状態に入つた。時計をみると四時前だつた。もはや、朝までねむることはできぬだろうが、その朝になつたならば、まつ直に広村志摩のところに駆けつけなければならぬ、というのがその時の心の絶対の要請だつた。それは、もつとも愚かなこと、悪いこと、臆病なこと、また不幸なことではあろうかも知れぬが、もはやそれは、決心というよりは、抗い得ぬ衝動だつた。それは、彼と志摩との、最後の抵抗、いや裏切であろう。その後には、どんな刑罰どんな破滅がくるか、それは一切わからない。

しかし、しばらくたつと、疲労し切つた体から生れる睡気にしびれ、一種のふてぶてしさも自棄の底からもたげてくるのを、ぼんやりと感じながら、とろとろとまどろんで行つた。——Kが、襖をそつとあけて入つてきたので眼ざめたのは、七時ごろだつた。Kは、顔を健康にかがやかせながら、

「さあ、これから須磨のうちへ行こう。今日も、講義はないんだろう。あつても休めばいいんだろう。」としきりに誘つた。

今里はしかし、夜更の決心を忘れてはいなかつたので、

かたくなに辞退した。それじや仕方がないから諦めよう、とKは残念そうにいい、朝飯の卓に、また何本かビイルを取りよせた。一口二口とのんで行くうちに、しだいに口が軽くなり、昨夜から心の中におこつたことのすべてを、Kの前に正直にはなしてしまいたい心持になるのを、押えかねそうになつたので、そんな大変な告白をしてしまわぬうちにと、引きとめられるのを振りはらつて、宿を出て電車の駅にいそいだ。明るい冬晴の朝で、空は澄み切つた光にみち、街のうしろの山波の紫の色が冴えていた。坂路の角などからは、濃青色の海の一片が見えたりした。空からの光は、高い建物のうえにはためく星条旗にたわむれ、いま開いたばかりの飾窓ごとに射しこんでいた。日本人、西洋人、中国人、インド人などさまざまの人間が、さまざまの服装をして、その明るい路面を、いきいきといそがしげに、ジイプや自動車のあいだをぬいながら往来していた。このような風景の中を、光をまぶしみながら歩いていると、昨夜の黒い影のことなどは、ともすればまつたく嘘だつたのだ、と感じられそうにもなつてきた。しかし、外光は胸の奥底までは射しつらぬいてこなかつた。そして、志摩に逢わなければならぬ、いや逢いたくて仕方がないのだ、という意識は少しもおとろえぬどころか、刻々に、奇怪なほどつよくなつて行つた。

十一年前、つまり戦争の前、今里は、はじめて広村剛之助青年の訪問をうけた。そのころは東京のある私立大学の教師をしていたのだから、学生の来訪は少しも珍しいことでなく、出入していた多くの青年の中には、もはや名も顔も忘れてしまつたものすらあるが、その時の広村のことは、ふしぎに鮮明に記憶にのこつている。晩春の午後、小さな家の内外に日光が明るくみち、隣家のおそ咲きの八重桜の花ひらが、ゆるい風が吹くたびに、こちらの縁側にまで散りこんできていた。せまい庭先でも、雪柳が純白な小さな花ひらを粉のように散りこぼし、その傍にはもはや山吹の花がひらきはじめている。小鳥がきてしきりに啼いている。その縁側に、彼と広村とは小さな籐椅子にかけて向き合つていた。広村は新しい学生服をきて、ひどくかしこまりながら、ものをいつていた。かなり背の高い、均斉のよくとれた体格である。色がやや白すぎ、髪がとり分け黒かつた。男同士のあいだで反撥を感じさせるほどの美貌ではなかつたが、眼がきよらかで、唇は少年のもののように赤い色をしていた。全体に、好もしい健康な印象だつた。それが、その晩春のこころよい眺と結びついて、はつきりとした記憶になつているのであろう。

広村は、今里の友人の紹介状をもつてきたのだが、今里のつとめている学校の経済科の二年であり、用件というのは、文科の方にかわりたいということである。時たまにそういう希望をもつてくる学生も無くはなかつたが、このように明るい顔をしたものがくることはなかつたので、ちよつと驚きながら、いつものように、今更に文科などに紛れ込んできてもどうにもなるものでないのだから、このまま経済科を卒えて、それでも好きで仕方がなかつたならば、ゆつくりと自分で勉強すればいいのでないか、——などと、月並な勧告をした。広村の意志も、それほど強いものでもなかつたらしく、しばらくするうちに、「それでは考えます。」と、顔をすこし赤らめてこたえた。それから、経済科にいても今里たちの教室に聴講に出たり、またこの家に遊びにきたりしてもよろしいだろうか、と、育ちのいい慎みを見せながらたずねた。もちろんよろしい、と今里は答えた。その時に、妻が茶をはこんできて傍に立つと、広村は一層かしこまつた。それから雑談になつたが、学校では自動車部に入つているとか、スケイトをしているとかということを話したりした。今里の妻がスケイトに興味をみせると、いつでも御案内しますといつた。家のことをたずねると、北国の海岸からすこし離れた村の大きな地主らしかつた。とり立てて名物もないが、冬のカニとか、ある種類の菓子とかは、多少自慢してもいいものであり、また、——これは親戚で造つているものだから自慢をしてはおかしいが、かなり上質の酒もできます、などと快活に話した。妻も、いつもくるような議論好きで喧しくとげとげしい文科学生などと比べたのか、広村には好感をもつたようだつた。

散歩がてらに、省線の駅のあたりまで送つたが、並んで歩きながら、今里はもう一度、いぶかしんだ。——この、深く考えたこともない、また深く考える必要もなさそうな、善い意味にも悪い意味にも明朗な青年が、どうして文学などと思いついたりしたのか、恋愛とか思想問題とかで壁にぶつかつたのかも知れぬ、と推察でもしてみるほかはなかつた。だがそれにしても、こういう青年は、よほど例外的な場合でないかぎりは、そのどちらにも、深く患うような事態には立ちいたらぬだろう。軽蔑した意味からではないが、そういう能力はまず無いだろう、としか思われぬ。——それでも、駅の前の喫茶店にさそつて入つたときに、それとなく、そのようなことについてたずねてみた。すると広村は、また顔をやや赤らめて、去年あたり、同郷の年上の声楽家としたしくなつたことがあるといい、それからそれと同じころに、下宿の隣室の官立大学生にさそわれて、数度社会科学の読書会に行つたこともある、と正直にこた

えた。しかし、その恋愛のようなものもいまは平静に帰しているらしく、思想問題の方も、それはいちじるしい退潮期だつたから、このような学生をなおも強力に引きずりつづけているとも思われなかつた。

「とにかく、そういうことからして、文科なんて考えるようになつたのだろうかしら。」と今里はきいてみた。

「それは分りません。だつて、そういうように考えてみたことはなかつたんです。——ただ、何だか、こうしていることが頼りなくて、空虚な気分がしてならなかつたものですから。」とかなり真剣な表情をみせて答え、それから、その空虚とは何だろうかと自分でも探りたいというように、首をかしげながら黙りこんだ。

昭和十二年、——中国の事変がはじまる年の春のことであつてみれば、人々は、まだにぎやかに充足した生活をたのしんでいたのだが、それでいて、何か足下の土が崩れるような感じが、ときどき襲つてきていたのであろう。しかし、その空虚感がどのような風穴から吹き流れてくるかを知らなかつたのは、必ずしもこの広村青年ばかりではなかつたろう。

*

それから夏まで、広村が二三度たずねてきたようにおぼえている。郷里の菓子を持つてきたかも知れず、今里の妻をスケイト場につれて行つてくれたかも知れない。その父からのみごとな筆蹟の手紙が、剛之助をよろしく指導していただき度い、といつてきたのもそのころだつたと思う。

七月の中ごろすぎ、今里は妻をつれて、数日間、富士山のかげの湖水のふちのホテルに行つた。蘆溝橋のことが奇怪な形をたどりながら拡がろうとしていた時だつたが、その錯誤にみちた罪深い悲劇の影のひろがりというようなことは、この避暑地の光景とはまつたくかかわりのないことだつた。その夏の人々は、ことさら陽気で享楽的で幸福らしくすら見えた。——しかし、あの時の心理状態がどんなものだつたかを、実感をもつて再現させてみることは今では不可能に近いし、あの時にははたして幸福だつたかどうかを、回想し吟味してみることも無駄であろう。

散歩している姿を見た、といつて広村がある午後ホテルにあらわれ、その夜は、近くの、彼の泊つているホテルの晩餐に招いた。今里たちが行つてみると、涼しい風が湖面から吹きながれるロビに、広村とならんで、品のいい老婦人が立つていた。母です、といつて紹介した。それから、窓ぎわに立つて夕日に光る湖水をながめている白服の少女をまねいて、ただ一人の妹です、と紹介した。女学校の上級生というほどの年齢だつた。母親と娘とは、夏休になつても東京であそび暮している広村を迎えるために出てきて、

そのついでにこうして旅をしている、ということだつた。食卓に向うと、広村の母は、今里の妻にむかつて、ほとんど訛のない言葉で話しかけ、この地方の風景をほめ、二日後に五湖めぐりをするといつて、同行をすすめていた。今里と広村とは、かなり多くビイルを飲み合つたが、それでも事変のことなどについて色々と話したようにもおぼえている。——少くとも、一度今里が、軽い気持でだつたが、いまに君たちも出て行くことになるかも知れないな、といつたときに、相手の顔がちらと曇つたことをおぼえている。それは幸に母の耳には入らなかつたようだが、妹は聞いたらしかつた。彼女はおとなしかつた。日本海沿岸系の女とでもいうのか、眉が月形になつていて美しく、眼が黒く、色が白く、豊かな頬が桜色をしていて、顔形全体がゆつたりとして左右均斉したおちつきをもつている。どちらかといえば大柄で、その白い服の胸は、もはや成長をしめしてふくらんでいた。人ずれをしていないのであろうか、今里の妻が何かを話しかけるたびに、頬をあからめて微笑をみせ、「はい」とか「いいえ」とかというばかりで、ともすれば、わけもないのに恥かしそうに顔を伏せたりした。広村の母は、すこしばかりビイルをのみ、まつたく幸福に満ちたりたような顔をして、二人の子供をかわるがわる眺めながら、一度北国の家にゆつくりと遊びにきていただきたい、と今里夫婦にいい、はては、これはまだ少し先のことではございましようけれど、と前置をしてから、この兄妹にいい連合がありますように、いまから心がけていて下さいませぬか、などといつた。広村はビイルのグラスをあげて大きく笑い、妹は卓上の夏草の花のかげに顔をかくしてしまつた。

あくる朝には、広村と妹とが馬にのつてホテルをたずねてきた。一緒に珈琲をのんだあと、二人は馬を走らせながら、露がきらきらと光る落葉松の林の中に入つて行つたが、それからまた湖の向う岸の青草の丘のうえにのぼろうとしているのが、ホテルの窓から見えた。「うらやましいような人たちね。」と妻はそつといつた。——その夕方も、二人はたずねてきたが、湖にいつしよに出て、今里は広村の妹をのせ、広村は今里の妻をのせて、凪いだ浅みどりの湖面にボオトを漕ぎ出したりした。漕ぎながら妹に何を話しかけたかは全く忘れたが、はにかみながら白い手を水に入れてたわむれている姿と、その背景をなした夕焼雲の紅さと富士の紫色とは、はつきりと思い出される。広村たちは、すこしはなれて漕ぎながら、しきりに笑いさざめいていた。それからホテルにもどると、広村は玉突をおしえてくれたりした。——そのあくる日には、二つの家族で、他の四つの湖水と樹林とを、車をやとつて見物した。一度丘かげの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook